



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099(226)5100 振込口座02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円

道標



Yet... Joy! Hope! Gratitude!

福音宣教は誰にでもできる!

教区の日特別講演でチエオン修道女

九月十一日(日)鹿兒島カテドラル・ザビエル記念聖堂で開かれた「教区の日 特別講演」で、韓国人講師チエオン・スンナム修道女(ヌヴェールの愛徳修道会)は、聖母マリアとそのご出現を受けたベルナデッタとの関係から、また韓国で進められている宣教の手法から福音宣教の心構えについて、集まった百八十人余りの信者に激励とも言えるメッセージを送った。



チエオン修道女

様が見たことを忠実に伝えたことで聖人とした。これは私達にも宣教できるという証」と信者を励ました。

また午後からは、チャ神父が韓国で進めている種子を風に乗せて運び、花壇でなくても花を咲かせ、人に踏まれても生き続ける強さを

修道誓願宣立六十周年

クリスト・ロア宣教修道女会 赤尾木レジデンス 阿部道子修道女

クリスト・ロア宣教修道女会赤尾木レジデンスのシスター阿部道子が修道誓願宣立六十周年(ダイヤモンド祝)を迎えた。

北海道出身のシスター阿部は、一九五一年に初誓願



穏やかな口調の中にも力強さのあった講演

午前中の講演で聖母マリアとその後出現を受けたベルナデッタについて語ったシスターは、「宣教には信じていることを喜んで伝える心が大切」と切り出し、「教会は健康、富、学識など何も持たなかったベルナデッタがマリア



この四月から有料老人ホームとして五人の同居者でスタートした「聖の郷」(NPO法人聖の郷ゆらいあい)では、「共生・共働・奉仕の心」を

入居者を募集

老人ホーム「聖の郷」

を宣立、その後すぐに西宮市の病院で結核患者のために働いた。その後は、中

新風

「おはよう」と朝のあいさつを交わす。もしこの言葉がなかったら

ことばを通して

「おはよう」の中、ゆるしと和解の心を、そして絶え間ない希望を。「ありがとう」にキリストの命を懸けた愛を。少しだけよい、日頃使う言葉にキリストの思いを添えてみたい。(寝占敦之)

東日本大震災

長崎教会管区の動き

東日本大震災から九月十一日で半年を経過した。連日報道される震災とその後の様子に遅々として進まない復興に、人の力の無力さを再認識させられる。先日、宮城県石巻市の単身ボランティアに出かけて行った青年信徒もそのようだったようだ。彼か

短信

▼夏期集中講座 第二十回目となった今年の夏期集中講座「あなた方の



常駐できる職員を配置するための資金作り。①に関しては、長崎大司教区の司祭とボランティア数人が二度、現地に足を運び整備した結果、ボランティアの受け入れ態勢がほぼ整っている。そのため金作りが永続できる体制を整えることが必要となる。教区ではそれらの手段について早急に検討する方針である。

▼マリア山荘黙想会 八月二十七日(土)から翌二十八日(日)にかけて、サンタマリア神父(国分教会)指導で、マリア山荘黙想会が開かれた。テーマは「典札と霊性」で、教区内各地から二十五人が参加した。

▼鴨池教会で堅信式 九月四日(日)鴨池教会(主任司祭G・ティエン神父)では、堅信式があり、中高生と社会人合わせて十九人が受堅した。



河野里実さん



加治原 誠君



河野朱美さん



林 聡一郎君



久保篤志君



池之上ジョナサン君



園田克也神学生

鴨池 河野里実

WYDへの参加は自分の信仰について考え、深める機会となった。WYDでは、毎日ミサがあり、分かち合いがあった。そこでは信仰について色々な人の思いや体験、悩みを聴いたり、話したりすることができた。WYDに参加しているからといって、全員が特別にありたい信仰を持っていない。うことでもなく、何か大切なものを求めて参加しているように思う。私自身、WYDの申し込み時は「今しか行けない」という思いで申し込んだものの、出発が近づくにつれて「自分の中の何かが変わるかもしれない。変わりたくない」という期待があった。

WYDでは多くの出会いや出来事があった。楽しいことや嬉しいことも沢山あったが、きつい時もあった。でも、日々お祈りして行く中で、イエス様だけは私の側にずっといてくれると強く感じるようになった。その度に気持ちが楽になった。WYDで一番心に残ったのは、ゆるしの秘跡だった。いつもは罪を告白して終わりみたいな感じがあったが、今回のゆるしの秘跡は違った。辛いことや苦しむことがあっても、それは神様の御手の中で行われていることと、神様から私への試練であるというように、罪を犯したとしても神様のもとに帰ったら必ず許して下さるということが実感でき、救われたと思った。

WYDに参加して、多くの人から刺激を受け、また、イエス様を自分の近くに感じることができた。このWYDで感じたこと、考えたことを思い出しながら、いつもイエス様と共に自分の人生を歩んでいきたいと思った。

ザビエル 林 聡一郎

「ワールドユースデー」を通して本当に多くの経験をさせていただきました。特に教皇様に会えたことは一生の自慢です。そして、言葉が分からない中でも、見渡す限りの何百万人という人々が同様の姿で祈るその様子には、文字通り「言葉にできない感動」を得ることができました。そんな沢山のかけがえない経験の中で自分が一番心に残っているのは、意外にも日本巡礼団の毎日のミサとカテケージスの中での分かち合いでした。日本巡礼団は午前中、毎日カテケージスといわれる勉強会を行いました。勉強会といっても簡単な講話のようなものと分かち合いです。特に特別な活動というわけではなかったと思います。しかし、幼児洗礼を受け、教会に行くことが普通という環境、そしてなかなか同年代の境遇の違う青年と触れ合う機会のなかった自分にとって、同年代の人々がどのような思いで信仰しているのかというものは、とても興味がありました。自分は先にも述べたように、幼児洗礼です。その

ため、もの心ついたときにはそこに教会があり、中学・高校になり忙しくなると、教会に行く機会が減りました。ただ行きたくないというわけではなく、表現は難しいですが、行くことが当然の一方で、教会の存在が当たり前で存在せず、行かないことにも罪悪感がなくなっていました。そんな自分の状況や考えを語り、様々な境遇の中でのマドリッドに集まった人々の話を聞く。ただ単純な作業でしたが、自分にとっては「いかに自分が恵まれた環境で信仰していたのか」を実感させてくれた活動でした。そして鹿児島特別日程で郡山司教様はこうも言われました。「私たちは、水瓶のようなもの。ただ完璧な存在ではないから、ひび割れ等があるものです。そして信仰とはその中にある水のようなもの。当然満杯になりません。ひび割れのあつた私たちが、常にその信仰という名の水がなくならないように、継ぎ足していく必要があります」と。今、たくさんの方々のおかげで、きつと水が一杯の状況にしていただけだと思えます。ここから空にならぬよう、日々頑張っていきたいと思えます。そしてできることなら信仰の水を分け与えられるような存在になれば幸いです。

志布志 池之上ジョナサン
日本人の信者が多いのに

僕らがスペインの地で見つけたもの ①

WYDの旅を終えた14人の若者たち
たくさんのお祈りと支援に感謝!

驚いたことからWYDが始まりました。そしてサンティアゴ徒歩巡礼となりました。最初に百キロ歩くというのを聞いた時は「余裕じゃない」と思っていました。が実際は巨大なリュックサックが重みとなってジワジワと体力を奪って行きまされた。また靴ずれにも悩まされた。足の裏は象の皮膚の様に分厚くなっていました。迷子になったり前日の疲れが取れないまま歩いた五日間、やつとの思いで辿り着いたサンティアゴ。そのときの自分は感動というよりも「さつさと休ませてくれ」という感情しかありませんでした。でも一日休んで改めて大聖堂や街並みを見て達成感にジワジワ包まれていきました。

神学生 園田克也

私はAコースといつて、サンティアゴ巡礼からのWYD本大会までのコースに申し込みをさせてもらいましたので、八月の初めに鹿児島教区のメンバーと空港で合流して、その後日本巡礼団にサンティアゴ巡礼のスタート地点で合流しました。そしてサンティアゴ巡礼が始まると、最初は元々知っていた友達と歩いていました。二日目からあまり知らない人たちが一緒に歩いてくれて、いろいろな過去の経験やWYDに参加した理由を聞かせてもらって、いっぱい考えさせられました。そうして行くうちに、人間不信や鬱になつていて表向きだけの付き合いばかりしてしまっていた自分が少しずつ変わっていきました。実は今まであまり好きではなかった人や苦手だった人がいたのですが、その人たちにも自分から声をかけていけるようになり、最後には心を許せるようになりました。そうしてゴールしたとき、疲れてるはずなのにうれしさのあまり走りまわってしまった。その後サンティアゴの教会にも行き、達成感を味わいながらミサを受け、とても感動しました。

WYD本大会ではカテケージスや分かち合いを通して、自分の信仰や今の自分が何ができるかを考えることができ、多くのことが得られました。この大会を通して、いろんな絆が生まれ、その絆によっていろんなことに気づかされ、何よりもどうしても腑に落ちないことがスッキリしたこと。がなよりの収穫でした。

鴨池 河野朱美
八月十四日から二十八日の二週間、私は、とても充実した時間を過ごすことができました。まず、海外の若者の姿から思ったことがあった。彼らは教皇様を「Benedicti! Viva Papan」と叫ぶようにして歓迎していた。最初は「教皇様にこんな慣れ慣れしくしているのだから」と違和感を感じていました。しかし、少しずつ感じ方が変わっていった。「彼らが教皇様に親近感を感じるように、私も神様にもう少し親しみをもちたいのかもしれない」と私は神様に畏敬の気持ちしか抱いていなかったが、「神様が天にいるお父様なら、もっと身近で親しい存在に感じてほしいのだ」と思うようになった。

また、日本巡礼団のカテケージスからたくさんのことを学ぶことができた。「受けるよりも与えなさい」とこの言葉がとて心に残っている。私はこれまで、家族、友人、先生方、そして神様から多くのものを与えてもらった。それに対して、私自身はどれだけのものを他人にしてあげられたのだろうか。今までの自分を振り返ると、自分に足りないものがたくさん見えてきた。そして、それが私の十字架なのだと思う。「十字架を背負っていくのはつらいなあ」と思った。帰国して普段の生活に戻ったが、今回のWYDでの恵みを大切にして過ごしていきたいと思う。イエス様に支えられながら、自分の十字架をしっかりと背負い、キリスト者としての生き方を通して神様の愛を証しし



大山輝晃君



杉山志文君



松蘭みなみさん



大牟禮裕香さん



岩崎信幸君



増田 滯さん



池之上直美さん

ていきたいと思った。

谷山 岩崎信幸

出発前には巡礼や本大会への不安もありましたが、スペインに到着すると期待と喜びの方が徐々に大きくなってきました。

トウイからサンティアゴまでの道程はとても長く、苦しいものでした。巡礼中には、一人で自分の信仰や将来について深く考え、悩むこともありました。しかし、皆と一緒に歩いているときには、話をしたり歌ったり、とても賑やかだったためか、時間の経つのがとても早かったように思います。長い巡礼を乗り越え、分、サンティアゴに到着して大聖堂でのインターナショナルミサの感動はとても大きなものでした。

本大会に入ってから開式ミサや教皇歓迎式典、十字架の道行では数十万という人数に圧倒され、人混みに揉まれていましたが、これだけ大勢の人々が共に歌い、祈っているというのは私にとって初めての体験でした。三日間にわたって行われたカテケージスは、三人の司教様が話をしてくださり、様々な視点から自分の信仰について考えるとても良い機会となりました。

鹿兒島教区が担当した日には、ザビエル様の宣教活動とレオ七右衛門の殉教についての寸劇を行い、三人の方々が自分の信仰を証しました。教皇ミサの前夜の祈りでは、突然の雷雨に見舞われながらも、皆が止むのを待ちながら一緒に祈っていたのが印象的でした。また、ザビエル様の法被を着ていたり、浴衣を着た人もいたの、たくさんの方々の人々から写真を頼まれたのが非常に思い深く、日本

指宿 大牟禮裕香

洗礼を受けていない私がWYDに参加させてくださったことにまず感謝いたします。私は、カトリック幼稚園に勤めたのがカトリックとの出会いでした。それまでは、教会で結婚式を挙げる場所。そういう意識しかありませんでした。でも、カトリック幼稚園に勤め、子ども達と毎日お祈りをして、神様のことを聞いたりして「神様」の存在を「神様が示してくださいました。生きる方」を知りました。ある日の寝占神父さんの説教は「一人が一番辛いと感じるのは孤独を感じる時。でも私達には神様がそばにいます。だから大丈夫」。その説教を聞いたときに福音をもっと聞きたい、知りたいたいと思いました。その時に、WYDに誘われて自分のプラスになる経験が出来るのではと思ったので参加を決意しました。



目指すサンティアゴはまだまだ遠い

WYDでは期待していた通りの素敵な出会いがありました。一つ目は「巡礼は人生と同じ」と歩く前に言われました。百の巡礼中に、くじけそうになって歩くのをやめたくなくなった時、先の方で私を待っていてくれた友がいました。友が待っていてくれたから百歩を歩ききることが出来ました。人生も同じよう

に、神様が私の歩む道の先で待っていてくれたのだと感じました。歩き終えた後のサンティアゴ大聖堂での神様と出会い、「神様との出会い」とはつきり言っていないのは分かりますが、歩ききって大聖堂の中でお祈りをしようとした瞬間に色々な感情が溢れてきました。そういう不思議な体験はきっと神様からのプレゼントなのだと思います。

二つ目は、多くのカトリック信者の青年達との出会いでした。みんな一人ひとりで生活している場所や生き方は違います。でも、皆、共通してカトリックの教えが、神様の愛が、バックグラウンドにありました。神様に愛されていると感じることが出来る青年達は、悩みながらも、笑っていました。笑いながらも、友のことを考えてくれる、優しい人たちがばかりでした。そういう人々との出会いは、私の心を温かくしてくれました。そして、信者ではない私を受け入れてくださった鹿兒島巡礼団の皆さんとの出会いです。この出会いはきつと神様からのプレゼント。WYDが終わってからもずっと繋がっていたと思います。

石田 望神父

今回の「世界青年の日(WYDイ)」で三度目の参加となりました。回を重ねるとともに多くの日本や海外の青年との出会い、海外のいろいろな文化、習慣、食事などに触れる楽しみがある中で、特に楽しみにしていたのはサンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼です。

毎年、A日程(前半から参加)するグループは、開催の近隣教区に迎えられる、本大会準備に向けて用意されたプログラムに参加するので、今回はその日程を使ってサンティアゴ・デ・コンポステラまで巡礼が行われました。いつか歩きたいという想いを抱いていましたので、五日間で百歩を歩くという呼びかけに少々戸惑いましたが、良い機会をいただいたと喜んで申し込みました。十以上の大きな荷物を担って一日平均二十歩を歩かなければならないという大変な覚悟を要します。私たちにあってWYDに参加する前準備としても大きな意味があったように思います。

実際、巡礼は過酷なものでした。百四十人という大きなグループで歩くため、歩きやすい環境を準備してもらいましたが、次第に蓄積する疲労や足の痛みに苦しみ、日常とはまったく違う環境に戸惑い、文句や弱音を耳にし始めましたが、不思議と青年たちの間で声を掛け合い、支え合う姿が見え始めました。同じ苦しみ

を味わっているからこそできることではないでしょうか。今ある便利なものを使えば簡単にたどり着くことができます。なぜ、わざわざ苦しい思いをしてまで歩くのか、という疑問が浮かび上がってきました。わたしたちの信仰の道はまさしくこの旅路に似ています。歩いてこそ見えること、知りえること、余計なものを担いでは歩くことができませんし、たくさん支え無しでたどり着くこともできません。招かれた苦しみに向き合い、受け入れて歩む姿に、寄り添い共に歩んで下さるキリストを実感できたのでしょうか。青年たちの歩く前と後の変化をみてみると、互いの中にキリストを見出したように思います。

(二月号でも感想を紹介)

司教執務室便り

若者たちのインマヌエル

八月にスペインで開催された世界青年大会(WYD)に日本から参加した三百人余りの若者たちから多くの感想が寄せられた。大会のテーマが「キリストに根ざして生きる」というものだっただけに、自分の信仰を確かめる機会になったように嬉しい。事務局から届けられた感想をいくつか引用しながら、紹介してみたい。

参加者の中には、イエス様が信じられないという若者もかなりいたようだが、現地での三日間にわたる三人の司教たちによる教理教育や何度もなされた小グループでの分かち合いを通して「イエスと自分との距離が縮まった」「自分の中に入れてくれているイエス様に出会えた」若者も多かった。そして「どんな時でも神様が愛してくれていること」が分かり、だから、自分の意志で参加したのだけれども、実は「神様が呼んでくれたから」だ、と気がつき「神様の存在がより明らかになった」という証言に思わず歓喜した。また、アジアからの参加者との交流会

や教皇様との夕の祈り、それに百五十万人の大群衆が集った派遣ミサなど、こうした初めての体験を通して、一つの信仰に結ばれている実感と共に「信仰に根ざして生きる」ことのすばらしさを気づかせてもらったようだった。

鹿兒島からの十八人は、大会終了後、園田神学生と共にザビエル様の故郷・パンプローナまで足を延ばした。神学校の設備の素晴らしいことに、一同、園田君を羨ましがったものだが、何よりも目を引いたのはお聖堂の祭壇部分。十字架上のイエス様の頭上に不規則に伸びる根のようなものと十字架の下に広がり始めるような白い花々。「神に根ざして生きると豊かな実りをもたらす」という説明に、誰かが声を上げた。「WYDのテーマと同じだ!」。ボク自身、まさに目からウロコ、創立者聖エスクリパー師の霊性に深く感動した。

こうして、若者たちとの三週間にわたる長い旅は、天使が告げた「我々と共におられる」インマヌエル(マタイ・23)との出会いの巡礼だったと言える。だから「日本カトリックは大丈夫」とボクも思う。



